

ランゲージ・デیفイカルティ

山田久 ● 経済学科教授

「世界のなかの『わたし』と『われわれ』」というタイトルのシンポジウムだということでお話をして、さてもう聞かれました。けれども今までのお話を聞いていて、さてこのシンポジウムで何をやるのか、何を話すのかということが、だんだんわからなくなりました。先ほどは人類学の話から始まって、経営の話もありましたし、人種差別の話もありましたから、これからどういうシンポジウムになるのか、なかなか興味深いと思っております。私は経済学しか知りませんので、経済学の話を通じて若干お話をしたいと思います。

私は「ランゲージ・デیفイカルティ」というテーマを掲げたのですが、それは私自身の留学経験と、世界のなかの「わたし」と「われわれ」ということで考えれば、私には「ランゲージ・デیفイカルティ」し

かないと思ったからです。

私が、ここで言っている「ランゲージ・デیفイカルティ」というのは、本当に英語の中にこういう言葉の使い方があるかどうかわかりません。しかし少なくとも私の留学の仲間の間とか経済学を勉強した連中の中で使われていた言葉であります。要するに、英語が難しいとか、英会話が難しいとかいう話ではありません。そうではなくて、留学というのは外国へ行つて勉強するわけですから、そこで勉強するときに、はたして語学が障害、障壁になるかどうかというふうな意味だとお考えいただきたいんです。そういう意味でここでは使っています。

このシンポジウムのはじめに水上先生のおっしゃったことの一つに、パネラーに問題提起をしてほしいと

いうことがありました。私の問題提起は非常に簡単です。私は経済学を勉強しているわけですから、経済学がはたしてユニバーサルなものであり得るのかどうかということ。つまり世界に一つの「経済学」があつて、その経済学のものですべての経済現象が説明できるのかどうか、ということを考えてみたいのです。それを問題提起にしたいと思います。これはまさに「ランゲージ・デファイカルティ」と同じなんです。経済学が国境なり、人々の考え方なりを乗り越えられるかどうか、そういう意味です。そういう意味でここにランゲージ・デファイカルティに関して二百字ぐらい若干書いておきました。〔注〕

なぜそんな話になるかということ、簡潔にまとめてみたいと思います。それにはまず私が、どういうふうな経済学を勉強したか、という話をしなければなりません。私は一九七三年、今から二十一年前ですが、アメリカに留学しました。学生諸君は大体そのころ生まれたのかなと思うと、私も随分年を取ったものだなと思つてがっかりしてしまいます。七三年に私は留学してアメリカへ行ったのですが、それがどのくらい古い話かといえますと、それは学生諸君が生まれた頃の話だということと同時に、アメリカへ行くのに羽田から出発した時代なんです。羽田から出発して、なおかつ、今はなくなつたパンナムに乗って行きました。帰

つてきたのが八四年です。僕は途中で一回も日本に帰つてこなかったものですから、八四年に日本に帰つたときには成田におろされてしまい、えらいところにおろされたなと思つたものです。

ただ、僕の先輩たちはもつとすぐくて、船で行つたという先輩たちもたくさんいました。私の大学時代の先生は戦後すぐにアメリカへ行かれていたわけですが、そのときには、今、横浜の山下公園につないである氷川丸に乗って行ったということ。氷川丸で延々と十日日かけてサンフランシスコへ行ったという苦労話を聞かされました。

七三年というのは非常におもしろい時期でした。日本の国際的な地位及び世界的な経済状況が大きく変わる時期だったのです。そういつたときにあちらに行けたというのはなかなかおもしろかつたわけです。ただ、生活的にはえらい苦労をしました。七三年当時、アメリカはかなりのインフレになつてしまい、もらつている奨学金がみるみる目減りしていくという、みじめな状況になりました。けれども、世の中が大きく変わる時期に米国にいられたということは非常におもしろかつたと思います。

さて、ランゲージ・デファイカルティにかかわる話です。留学となりますと、私の場合はアメリカへ行きましたから、英語で勉強するわけです。英語自身は別

注・私は一九七三年に米國へ留学し、経済学部の大学院生・研究者・教員として約11年を過ごしました。その間さまざまな場面でランゲージ・デファイカルティに遭遇し、その度に「日本文化」の相違点や、思いがけない共通点などに驚かされました。そして私にとつてより重要なことは、現代経済学そのものが「欧米文化・哲学」を基盤としていることから、エコノミックス・デファイカルティの発生もありうることを予感できたことでした。

に大した問題ではないんです。というのは、英語がやさしいとか難しいとかいう話ではなくて、経済学を勉強するという立場から見れば、英語というのは要するに道具なんです。道具というと語学の先生に叱られるかもしれないけれど、要するにただの道具なんです。パソコンの中身を知らなくても、ソフトの中身を知らなくても使えればいいわけです。自動車のメカニズムを知らなくても、運転ができればいいわけです。私は語学というのはそんなものだという気持ちがあります。ですから、語学の先生からは、だから経済の人の英語は優雅でないというふうに言われるんですが、別に優雅でなくてもいいんです。コミュニケーションができて、そして経済学の勉強ができればいいわけで、何も優雅な英語を勉強するために留学したわけではないのです。ということを常々我々は、語学の上手な人たちに對する、なかばやつかみ半分で言っていました。我々は経済学を勉強するのであって、英語を勉強しに留学したのではないんだと言いつ張っていたわけです。

ランゲージ・デیفイカルティに関して一番おもしろかったというか、非常に深刻な問題だと思つたことがあります。大学院ですから人数は少なく、いつもゼミみたいな形で授業をきっちりやるわけです。授業中、教師が生徒に質問します。大学院の授業は質問で成り立つような授業ですから、沢山の質問をします。

そうするとしばしば答えられない状況があるわけです。答えられないときに、アメリカ人の先生で、この学生は外国から来ているから英語に問題があつて答えられないんだらう、というふうに思つてくれる先生もいますが、ランゲージ・デیفイカルティなんかはないんだという先生もいます。君がそこに座つていて、私の質問に答えられないのは、英語力の問題ではなくて経済学がわかつてないからだ、という言い方をするわけです。つまり語学が壁になつていてはなくて、経済学力のなさが壁になつていてはなくて、経済学をやられますともう外国人学生はびびっちゃいますね。ある程度は本当に語学の壁というのがあつて、それがあつたのに、そういうふうな形で、何も言えないのはおまえの経済学力がないせいだと言われたら、もうどうしようもなくなるわけです。留学生はそういう冷汗をかきながら勉強しているわけです。

ところが、そのうちに何となく要領がわかつてきて、コミュニケーションできるようになります。それは結局、経済学がだんだんわかつてくるからそういうふうになるんだらうと思つて、語学留学生以外の一般の留学生は英語はそんなにうまくないわけです。ところが、だんだんやつているうちに要領がつかめてきて、そしてコミュニケーションできるようになってくる。そうなると英語は壁ではなくなつてしまふんです。経

経済学の大学院の教室の中において交わされる言語というものは、もはや英語ではなく、ほとんど単なる記号にしかすぎないというふうな状況になります。

それで、冗談めかしてこんな話があるんです。ある大学は留学生が非常に多くて、大学院経済学部半分以上がアジアからの留学生だったという話があるんです。そういうときどういうふうにして議論が行われているかというところ、じつはだれもしゃべらないというわけです。疑問があるとすぐに黒板に走って行って、黒板の前で図を描いたり式を書いたりしてお互いにコミュニケーションするというんです。そういうクラスを担当した教師は、だんだん自分は英語が下手になっていってしやうがないというふうなことを言っていました。ランゲージ・ディファイカルティというのは、経済学を勉強する限りにおいては存在しないというのが、私自身はずっと感じてきた結論のような気がします。

そういうふうにして考えていくと、では経済学自体はどうなのかということになります。アメリカで勉強した経済学がはたして本当にユニバーサルな経済学なのかどうかというのが、自分にとっては一番の問題意識であるわけです。八四年に日本に帰ってきたころには、当然アメリカの経済学は絶対にユニバーサルなものだということふうに思っていました。思っていましたけれども、いざ実際に日本で生活を始めてみて、日本の経済

を分析してみても様々な経験を積んでいくと、どうもおかしいぞという気がどうしても出てきます。

なぜそうなるかということなんですが、そこで「わたし」と「われわれ」というテーマが関係してくるかもしれません。アメリカの経済学の根本がどこから出てきているかといえば、西洋近代文明というか、西洋合理主義というか、そういうところから出てきているわけです。そういうところから出てきて構成されている経済学ですから、西洋文明の影響のもとにある経済を分析するには役に立つわけです。

私は七三年にシカゴ大学大学院に留学したんですが、シカゴ大学というところは経済学のメッカのようなところなんです。そんなところへ直接飛び込んだものですからえらい苦労してしまつたんです。ノーベル賞経済学者のミルトン・フリードマンとか、ミルトン・フリードマンの弟子のゲーリー・ベッカーとか、その他にも世界的に著名な先生たちがたくさんいるわけです。そういう人たちが経済学をどう考えているかということが一番疑問に思うわけです。ですからいろいろな機会をとらえて、直接に聞くわけです。ゲーリー・ベッカーというのは一九九二年度のノーベル経済学賞をもらっている人なんですけれども、彼がこう言うんです。「この」経済学、つまり自分たちがつくり上げた経済学という言い方をします。(シカゴ大学の教師たちとい

うのは、ミルトン・フリードマンを初め、T・W・シ
ユルツだとか、ステイグラール、特に九〇年度からはノ
ーベル経済学賞を、ミラー、コース、ベッカー、去年
のボーゲルに至るまで毎年シカゴの教師がとつていま
す。彼らには自負があつて、この経済学は自分たちが
つくつたんだ、自分たちが完成させた経済学だとい
ふふうに思っているわけです。」「この」経済学が、欧米
の経済分析をするときには非常に役に立つということ
はわかつた。なぜならば自分たちがつくり上げて、自
分たちで分析してみても、実によく説明がつくんだと
言うわけです。

では、アジア、特に日本に関してはどうかという
と、こういう先駆者というか、本物の経済学者たちとい
うのは実に明快な答えをします。「わからない」と言うの
です。」「この」経済学がアジアの分析、特に日本の経済
の分析をする際に有用であるかどうかということは自
分にはわからない。なぜならば自分はアジアを知らない
からだ、はつきり言うわけです。じゃあどうした
らいいんですかと問うと、それは君らの仕事だと。お
まえが日本へ帰つて、これから「この」経済学を利用
して経済分析をやってみて、そしてそれが使えるかど
うか試してみろというわけです。そしてそれを楽し
みにしているというんです。

アメリカで経済学を勉強すれば、アメリカの経済学

はユニバーサルで、何にでも応用できるんだというふ
うに思うんです。しかし私がかんだん疑問に思い始め
てきたのは、アメリカの経済学というのは合理主義を
もとにしてつくられている。この合理主義というのは、
いろいろとめんどうくさい解釈があるかもしれない
けれども、簡単に言えば、西洋近代文明というか、西
洋近代思想そのものです。その流れの中で重要なもの
はキリスト教だと思ふんです。それで問題なのは、ど
うもキリスト教を根幹とした合理主義の一つの典型と
して、白黒をはつきりさせるという点があると思ふん
です。いいか悪いかをはつきりと区別する、そういう
考え方が中心にあるんです。

ところが、その辺を考えると、アジアの、特に
儒教圏や仏教圏を考えると、白が常に白であるとは限
らないんです。黒が常に黒であるとも限らないわけ
です。これは外国人から、特に欧米の人から見ると腹
立たしいぐらいに、日本人のイエスは時々イエスだ
けれども、時々はノーだということになるわけです。
同じことでも、日本人がノーと言つたときは、あると
きはノーだし、あるときはイエスだということ、わ
けがわからないじゃないかと言うわけです。確かにそ
う考えていくと、仏教の影響を大きく受けた日本の考
え方というのは、白黒をはつきり区別できないとい
う点が確かにあるわけです。

そういうふうを考えていくと、白黒をはっきり分けるということが大前提として、アメリカの経済学が、白黒をはっきりできないような日本の文明に適用できるかどうかといったら、これはかなり疑問だということふうに思っています。

経済学の歴史をみると、経済学はやはり大國から出てくるんです。経済学は經濟大國から發生します。アダム・スミスの經濟学は、當時の經濟大國であつたスコットランドから出てきています。その次にマーシャルやケインズの經濟学は、大英帝國から出てゐるんです。そして現在のアメリカ經濟学というのは、戦後すぐの經濟大國、スーパーパワーであつたアメリカから誕生してゐるわけです。そういうふうにして歴史の演繹をしていくと、今の日本が一應經濟大國であるとするれば、バブルがはじけて少しポシャつてはいますけれども、そういった經濟大國日本から新しい經濟学が出てきてもおかしくないという氣持ちがするわけです。

資料に書いてゐるように、エコノミックスではなくて、エコノミックス・デファイナルティというのはあるのではないか。つまり、さまざまな國をユニバーサルに分析できるような經濟学というのは、実は存在しないのではないかという氣がするわけです。

もう一つ、なぜアメリカの經濟学がおかしいと思えるかということ。今日の經濟を考へていただくこと

アメリカの經濟ははっきり言つてきりきり舞ひしてゐるわけです。しかし經濟大國の最たるものであることは確かです。GNPで測つてもGDPで測つても、何で測つてもアメリカが超大國であることは間違ひありません。勞働生産性の問題でも何で測つても、とにかくアメリカの經濟が非常にすぐれてゐるということとは間違ひないわけです。日本がそれに次ぐぐらいの力であるということも間違ひないわけです。

ところが、大きさと効率性に関してはアメリカの經濟はいいとしても、伸び率というか、変化率というか、成長率、特に經濟成長率の問題を考へてみますと、現在は頭打ちになつてゐるわけです。おまけに、アメリカは現在、財政赤字と貿易赤字という双子の赤字で悩んでゐるわけです。そういったこと等を考へると、確かにアメリカの經濟は大きくてすぐれてゐるけれども、ある種きりきり舞ひをしてゐるということふうに言わざるを得ないわけです。

では、日本經濟はどうか。日本經濟は、確かにバブル崩壊の影響を受けて一時的には落ち込んでいますけれども、成長率の問題から考へても、効率性の問題から考へても非常にすぐれたものがあります。特に歴史的に考へれば、まだ日本經濟というのは近代化されてたかだか百年ちよつとしかたつてないのです。その中でこれだけのパフォーマンスを達成したのは大変なも

のだということがわかります。

ところが経済学のスーパースタースから考えてみてどうかという、日本の経済学というのは、実は全然世界的なレベルにはなっていないわけです。世界的なレベルという言い方はおかしいかもしれませんが、例えばノーベル経済学賞の数で考えれば、日本の場合はゼロですから、比較になりません。ですから日本の経済学がユニバーサルになるかどうかということは、もともと先の話なんです。私が疑問に思うのは、アメリカにあれだけ優秀な経済学者がたくさんいて、それでどうしてあんなにアメリカ経済はきりきり舞いするんだらうということですか。そこが一番おもしろい点ではあるんです。

体験的に考えてみて、シカゴ大学にしても、他大学にしても、大変すぐれた経済学者がたくさんいる。おまけにそういつたすぐれた経済学者が制度的に経済政策の策定に参画できるシステムがある。日本の場合はないんです。日本にはないので、アメリカの場合は、大統領経済諮問委員会があって経済学者が経済政策にかかわっています。私はその国の経済パフォーマンスは優秀な経済学者の数に反比例するんじゃないかという、そういう言い方をしてみました。日本は、世界的に活躍しているという意味での、または世界的な賞をもらっているという意味での優秀な経済学者の数

は少ない。これは客観的事実ですからそのとおりですが、それにもかかわらず経済はうまくいっている。ところがアメリカはうまくいっていない。

私がそういった考えを持った理由の一つは、私シカゴ大学にいたときに、シカゴ大学には南米からの留学生がたくさんいたんです。アメリカの大学というのは世界に対してある種のテリトリーを持っていて、シカゴ大学は南米がテリトリーで、ハーバード大学は東南アジアがテリトリーでした。シカゴにはアルゼンチン、ブラジル、チリ、ペルーとか、南米からたくさん留学生が来ていたわけです。彼らは本当に優秀なんです。どういうわけかものすごく優秀で、三、四年ぐらいで経済学のPh. D. を取って帰っていくわけです。帰っていったら、チリにしても、アルゼンチンにしても、一緒に勉強した仲間たちが国に帰るとすぐに中央銀行の幹部になったり、大蔵省や財務省の幹部になって、実際に経済政策を担当するんです。

それでどうなるかというと、そういった国の経済は大抵だめになるんです。優秀な経済学者がたくさんいる国の経済パフォーマンスはみんな悪くなるんです。一番いい例がチリです。一九七四年にアジェンデ政権が倒れました。そうすると、その当時シカゴ大学にいたチリの連中が大喜びしたんです。さあ、これで自分たちの世界が来ると。今まではアジェンデのために苦

しめられていたけれども、今度我々が国へ帰ったら経済政策の実験をやるんだということで、本当に帰っていったわけです。それが一九七五、六年の話なんです。彼らはシカゴ・ボーイズと言われて世界的に有名になりました。シカゴ大学で勉強した連中が国へ帰って、実際に政府の中核について経済政策をやったんです。そうしましたら、七〇年代の後半はけっこうまくってました。ところが八〇年代になってからおかしくなりました。チリの経済はがたがたになって、僕の仮説が当たったような状況になったわけです。

そのときには、シカゴ学派経済学の失敗というふうな喧伝されました。シカゴの市場重視学派がだめになったんだというふうな言い方をされました。ところが最近またチリの経済がよくなってきまして、そういう連中がまた復活しているということがあります。

話をそろそろやめますけれども、要は世界と自分たちを考えたときに、「世界」というのは非常に難しいというか、理解が難しいと思うんです。特に「国際」という言葉で考えてみるとさらに難しいわけです。自分を世界の中に置いてみてどういうふうな考えればい

いかということになると、わけがわからなくなりまして、例えば私自身としても日本以外のどこを知っているかといえ、アメリカの一部を少し知っているぐらいで、あとヨーロッパにだつて一カ月ぐらいしか行ったことがないし、オーストラリアもそんなものだし、アジアには香港しか足を踏み入れたことはありません。ですから世界と自分なんていうことは到底言えないわけですね。

そういうふうな考えていくと、世界とか国際というのをどういうふうな解釈すればいいかというところ、一べん外から日本を見てみるということなんだろうなと思うわけです。外から日本を見てみる、これが世界という意味なのかと思うわけです。だとすればどこから見てもいいわけですね。日本の外から見ればいいわけだから。そして、私自身が勉強した経済学の観点から考えると、「ランゲージ・ディフィカルティ」という言葉を使いましたけれども、要は、はたして西洋の合理主義をもとにしてきた経済学というのが本当に東洋の経済分析にも役立つのかどうかという、そういう問題もあるんだということ提起したいと思えます。